

赤穂
義士
烈婦
銘々傳
完

明治期本

柳田文庫

文庫11

A 1686

10

15

20

25

30

文庫11
A 1686

年月多有人編輯
樽主人補闕

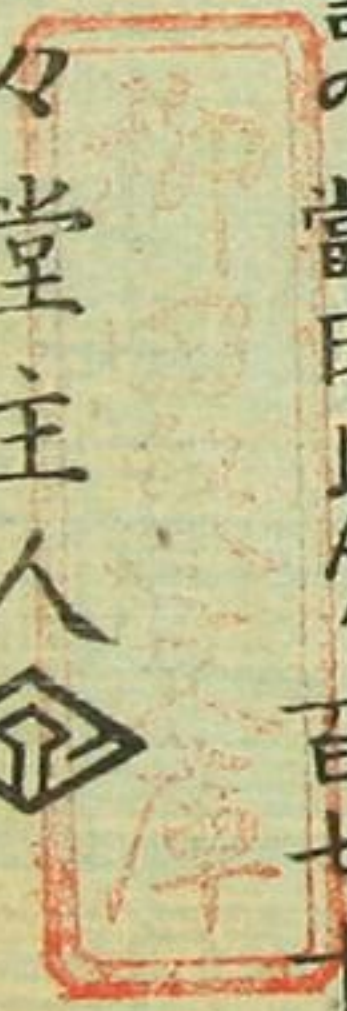


赤穂
義士
烈女
傳

明治十
八月
補刊
東京
文永
堂刊

古人曰諸葛孔明が出師の表と讀で涙と不下者ハ必不忠の人なり
と。赤穂の忠臣大石良雄が遺書祭文と讀て大義明分と知り者ハ誰
歎き憐れまふと人々の遺族小至くも亦此節婦烈女あり友人山々亭
有人子ハ常小義と重んぶとて義士の事蹟と採ること好む此書成
編集しん。刻成の後ハ剗版家祝融の災ハ罹て巻首の二丁と灰燼
となり。仍て版元文永堂主人再び著者小稿と乞ども繁忙
ありしと昔れ糸バ子ガ好古の癖ありと知り。巻端の一丁と補ハ
請ふ。俟ふ。筆と寒夜の燈下ハ走らせ。有の儘と序文ハ換ふ。
時ハ明治十三年十二月十四日。義士ガ復讐の當日より百七十
有九年なり

京橋の隠士 轉々堂主人



文武の車の両輪の如く忠孝の道も又然り
 内藏之助の能く四十七歳で
 勵まへて復讐の謀り妻
 子や但州豊岡の實家石束
 氏不托一獨長男主税や山科
 の閑居に留め君恩を地下に報
 ざる為に死を勸む然れども
 之を父子の愛情より一時
 未だ十五歳の少年なれば甚
 傷み惜めども不義の
 生を替り汚名を千載に遺



さうなり義不斃れて譽と
 百世不擧よ是却て吾が汝成
 愛する情の深き所なりと
 諭せし主税欣然として我
 若年なりと雖も聊大義の道
 知まば死と潔くして父子國不殉るるの
 義士と稱されん事と希ふとありしに
 内藏之助の其志を感して泣涕して元禄十五年九月十九日
 盟約状の一卷を授け間瀬久太夫大石瀬左衛門等不
 添へ關東へ先發せしめしに楠公の櫻井の驛の訣別不鬻鬻たり
 嗚呼忠臣の孝士の門不出ると真なる哉



右一章

轉々堂主人補記



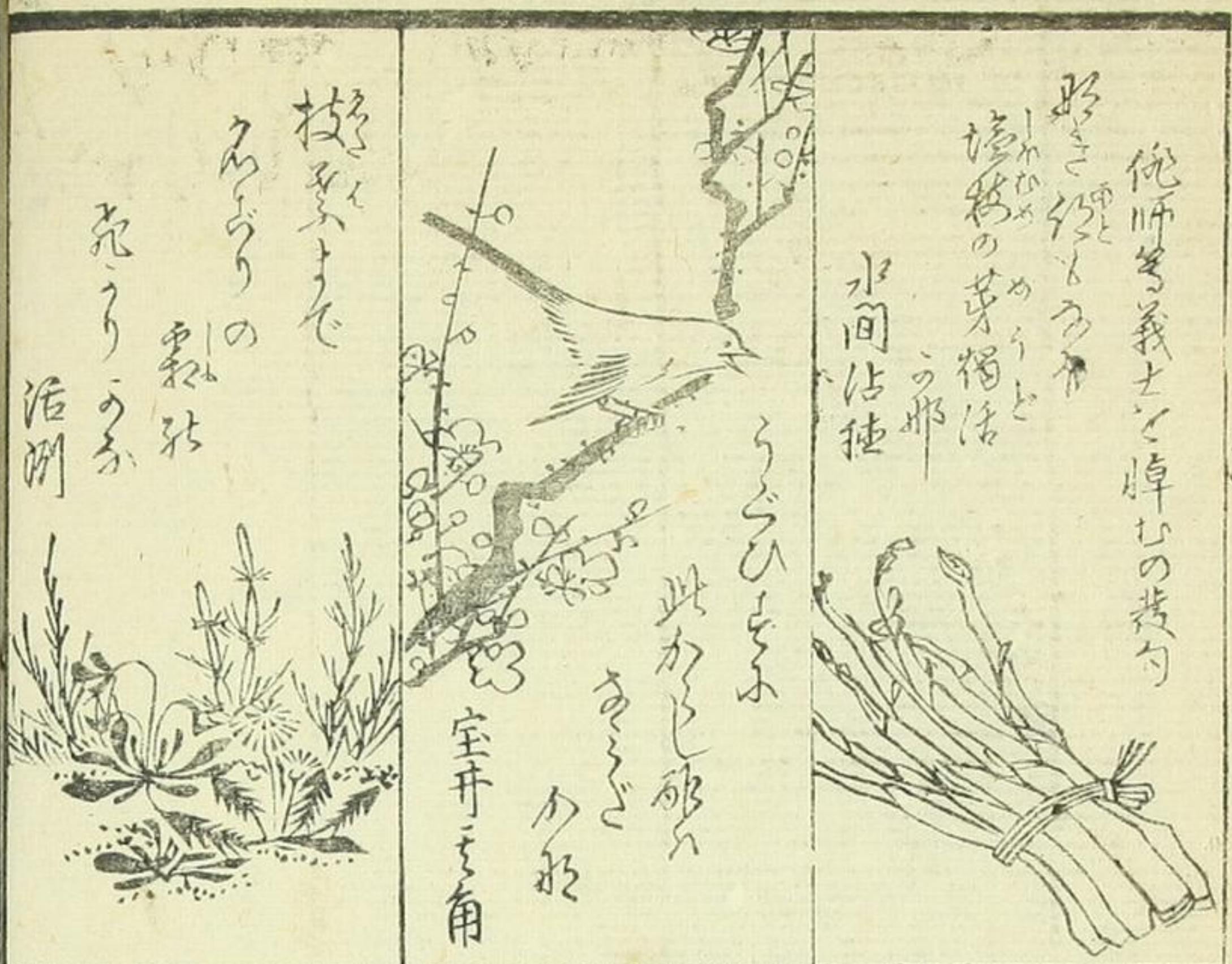
吟光
 補圖

因道長新... 國... 会... 面... 上... 上... 泉... 首...



山岡清久夫人
 春の別を乃
 花ももよ

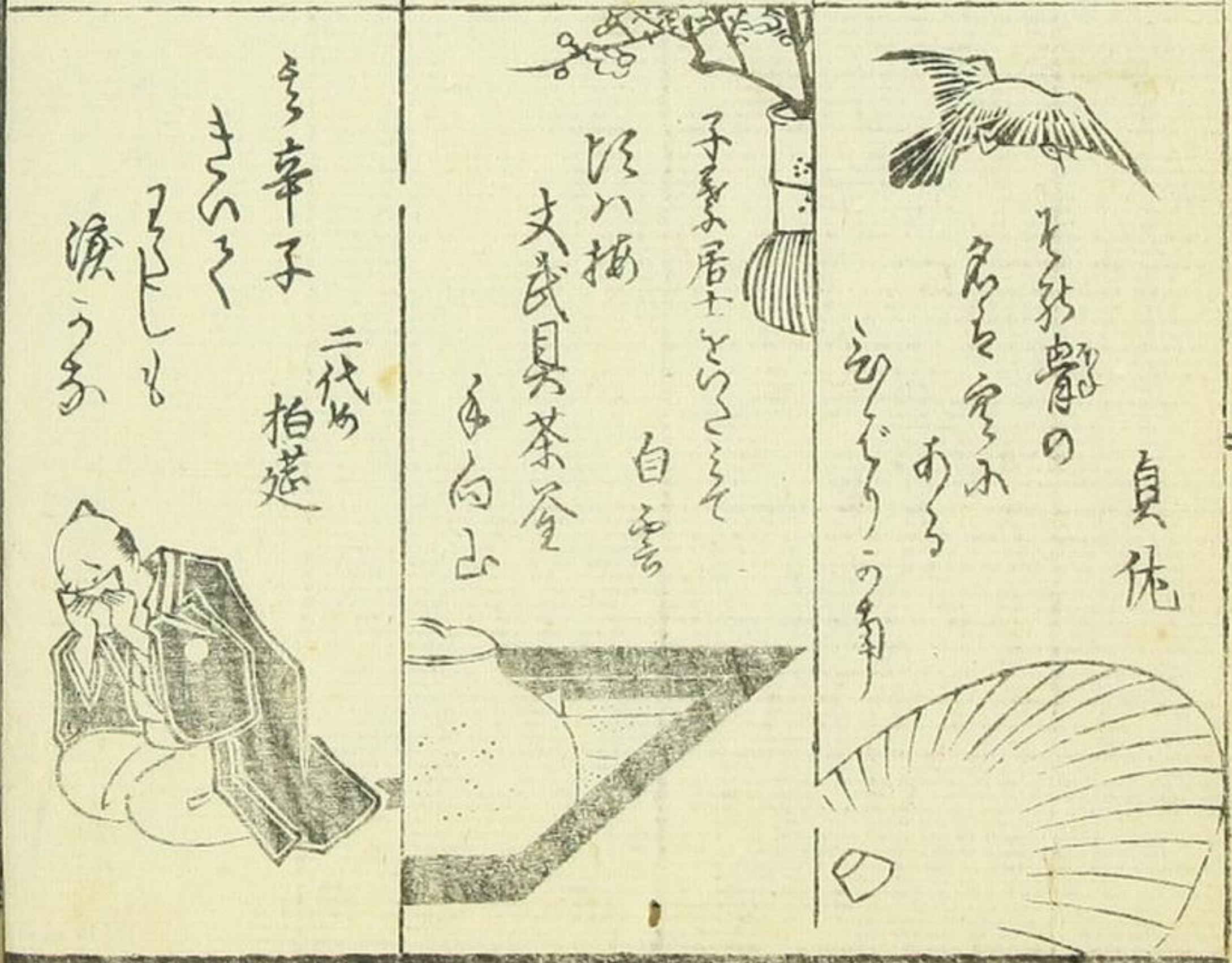
長 死
 死 乃
 乃 乃



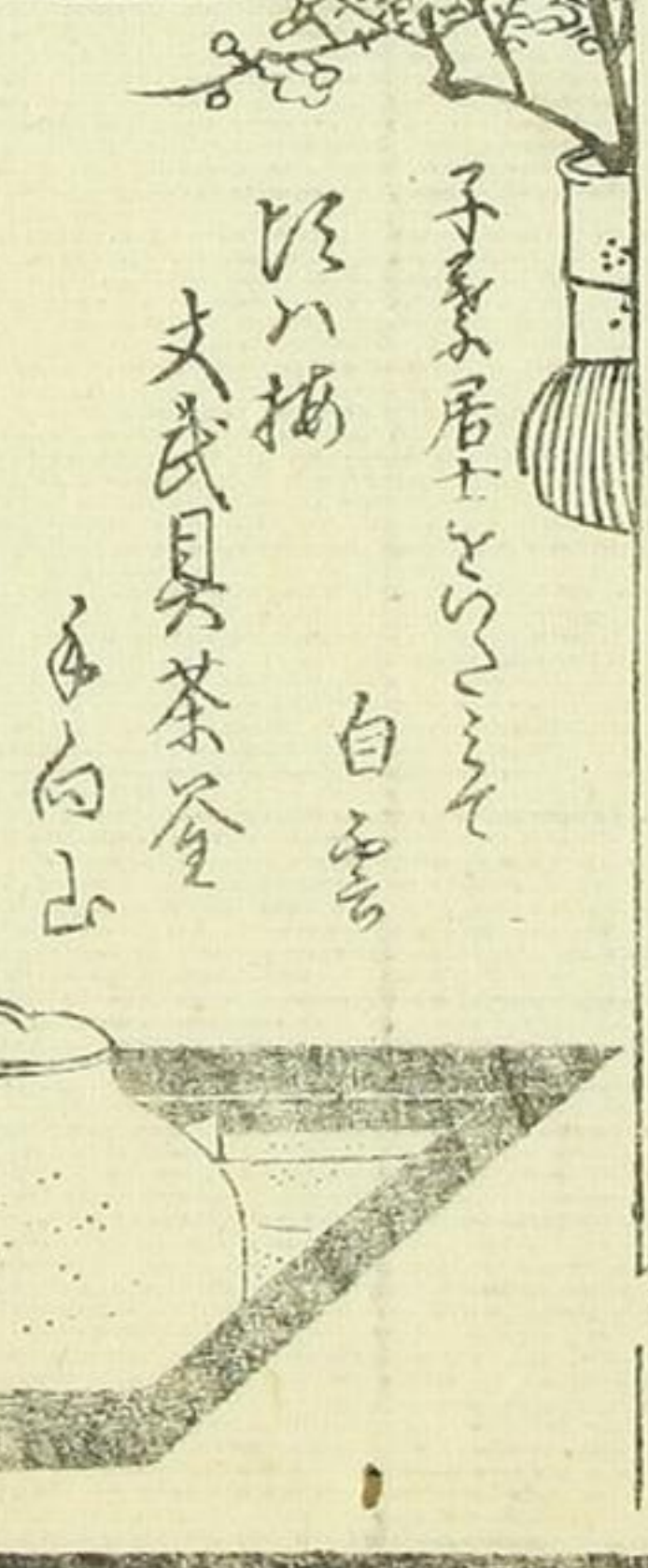
枝...
 花...
 活...



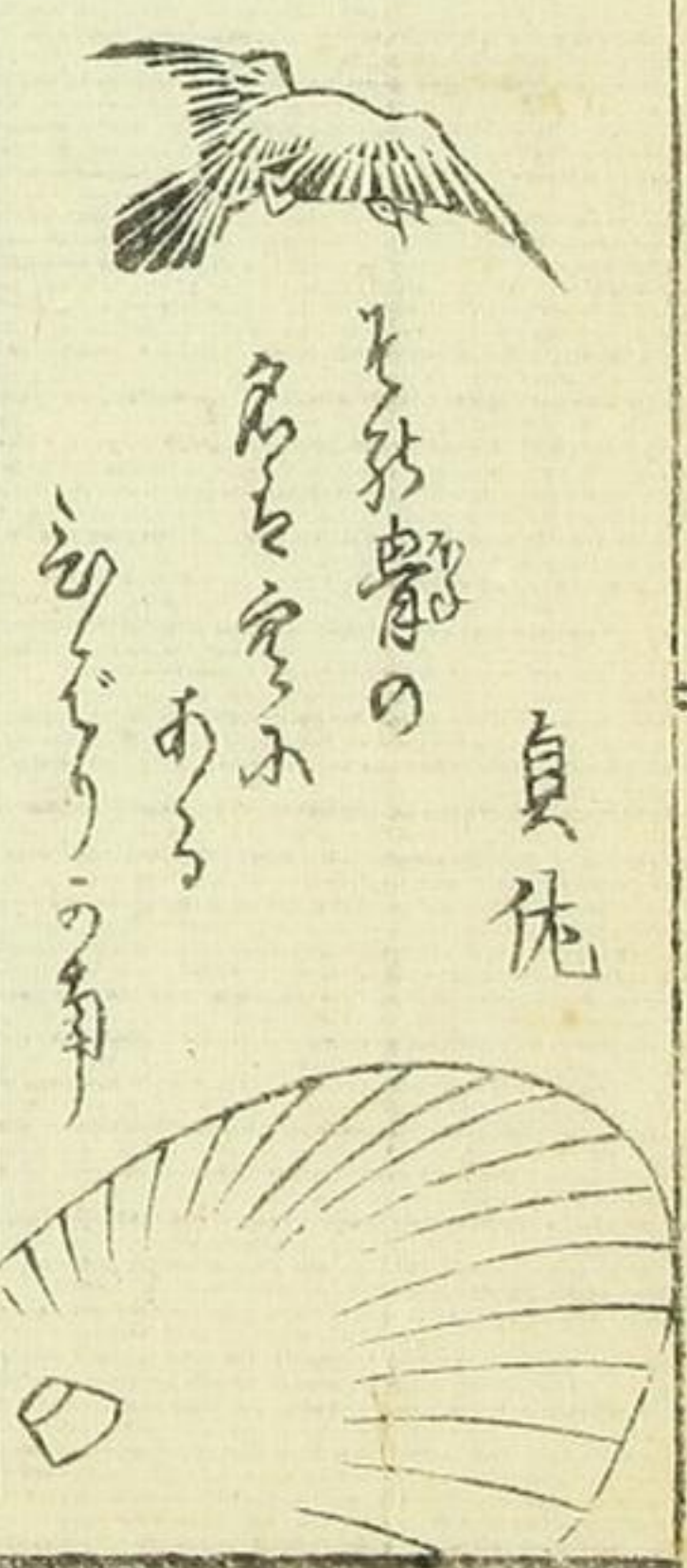
他...
 水...
 宝...



辛...
 拍...



子...
 夫...
 白...



負...
 名...

此女房の居る所より泉源夫人
 お静中へお女と申すは
 なる男子お静中が御座る者
 されば夫人の寵遇も又他へ
 越り義士も御座る者
 夫の使と申すは御座るものと
 内務助お静中へお女と申すは
 されたる御座る者女子と申すは
 死と申すは御座る者お静中へ
 南寺へお静中へお女と申すは
 世の世の御座る者お静中へ
 泉源夫人の御座る者お静中へ
 くと申すは御座る者お静中へ
 夫と申すは御座る者お静中へ
 此女房の御座る者お静中へ

金銀の妻の名を懸子と申すは
 夫の御座る者お静中へ
 世の世の御座る者お静中へ
 泉源夫人の御座る者お静中へ
 くと申すは御座る者お静中へ
 夫と申すは御座る者お静中へ
 此女房の御座る者お静中へ

戸田の局
 侍よりあつた
 寛人ごら
 きたか
 うき世
 ありきごと
 此等、終つたる事と歌とある

堀の跡を懐金丸妻
 老
 思ひ
 名
 世
 此等、終つたる事と歌とある

名と幸と...
 御父の...
 義士の...
 罪...
 の志...

始末...
 七十一...
 あり...
 とい...
 後...
 あり...
 ...
 ...
 ...



名ハ丹子同播灰方氏の女ハ
義氣風雅傳小五郎行記
十内教皇の後教通の
通小より安後ある
元禄十六年二月三日の文
富自盡の後ハ下小あり
富自盡の後ハ下小あり
富自盡の後ハ下小あり



ひかり
か
河らび
妻のや子のまらん
小野寺秀和妻

村松三平が妹ありを
三平忠孝全きと
目撃す七郎左衛門
主税が妻と云ふあり
その奥妻と見れば雄由
そとの奥妻と見れば雄由



玉の
小野寺
中よ
乃ち

十平治の身小僧...
 無法...
 士之内...
 十平治...
 老母の身...
 十平治...

書...
 十平治...
 十平治...
 十平治...
 十平治...

十平治...
 十平治...
 十平治...
 十平治...
 十平治...

十平治の母



死と...
 作...

横川助平伯母



た...
 流...
 名...

這中三位

手向

覺兵衛の妻の斤田源若者
 妹あり夫を尋ねて目撃の
 人あり... 山神は
 子... 義士...
 吉良家... 奉...
 内事... 義士...
 村... 義士...
 良... 時...
 青山... 下...
 刺... の...



山屋覺之流妻

大高源... 妹... 十九
 文... 押...
 後... 死...
 の... 三...
 て... 三...



村松三右衛門妻

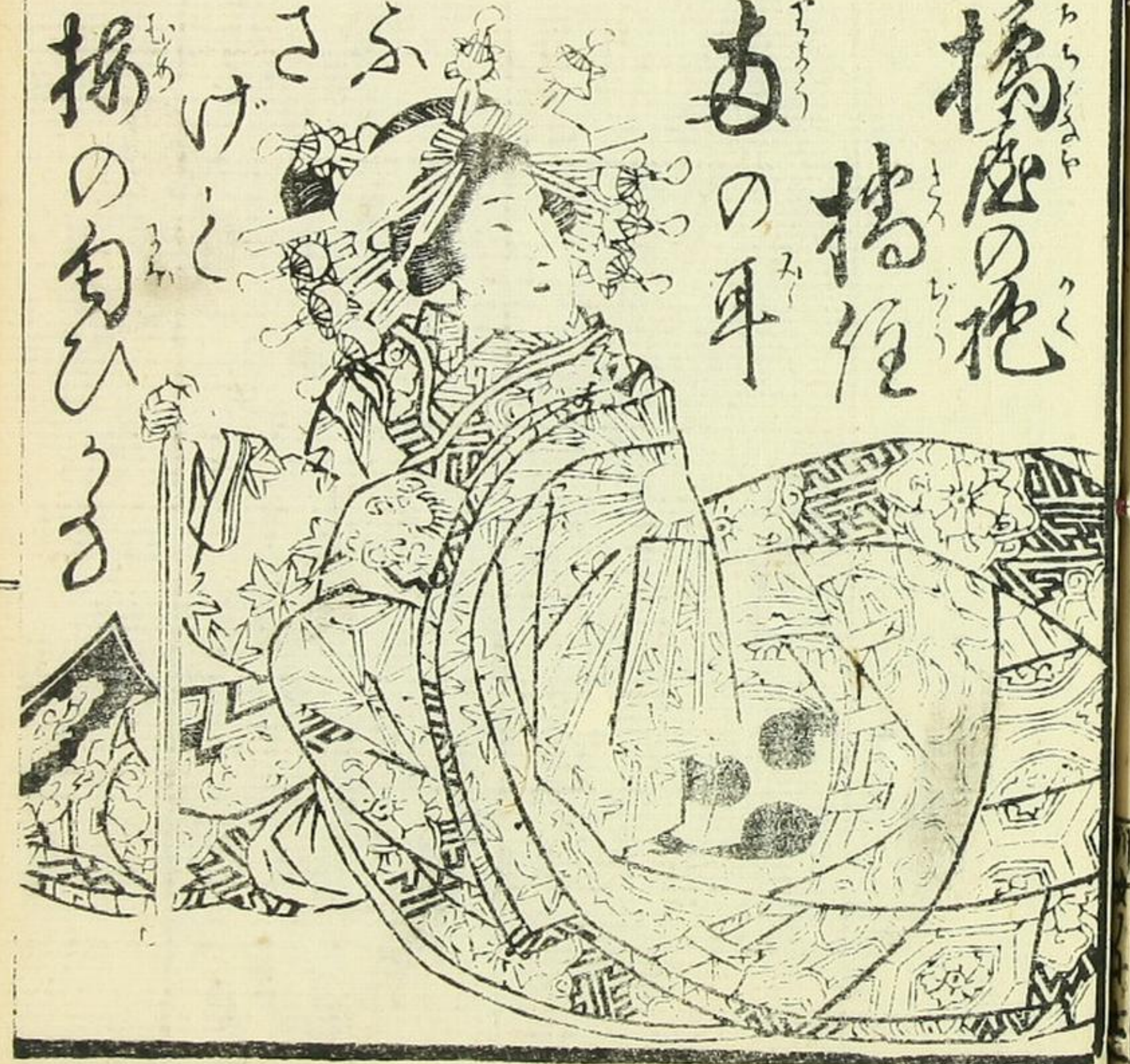
お...
 小...
 村...
 の...
 の...

諸君の御守り長國寺と
 のふき中 燈籠の七ヶ環
 ありとては喜のゆゑと
 その葉のひかりは
 小大ひかりの
 いろく 喜の葉の
 名内 喜の葉の
 橋小 喜の葉の
 板の 喜の葉の
 七門の 喜の葉の
 ありとては喜のゆゑと
 ありとては喜のゆゑと

江戸吉原の妓より大勢の
 上りのおくら 同様の七ヶ環
 が 喜の葉のひかりは
 ありとては喜のゆゑと
 ありとては喜のゆゑと
 ありとては喜のゆゑと
 ありとては喜のゆゑと
 ありとては喜のゆゑと
 ありとては喜のゆゑと
 ありとては喜のゆゑと
 ありとては喜のゆゑと
 ありとては喜のゆゑと



武林唯七妻
 三十年來一愛
 中
 取
 我筆人曰
 家郷卧病雙親
 在膝下奉歡恨不終



橋の花
 橋の
 友の耳
 さふ
 揚の匂ひる

京都畿内町の城女あり
赤穂の浪士城の大旗を
掲げしや赤穂の風流を
歌ゆくは浪士ありあり
うらぶお別れしやを
いそぎ向くは移りし附この
士をわたりし別れしやを
新藤新井くおけりしやを
世に男もそとろ小袖をひこ
して別れぬありしやを
赤穂浪士の後継の若き
おとせしやをわたりしやを
おとせしやをわたりしやを
おとせしやをわたりしやを
おとせしやをわたりしやを
おとせしやをわたりしやを
おとせしやをわたりしやを
おとせしやをわたりしやを



赤穂浪士の後継の
世と同心の心を
通ふとせめく
形えともえん

妓女新藤

形えともえん

大高源次郎の城女あり
赤穂の浪士城の大旗を
掲げしや赤穂の風流を
歌ゆくは浪士ありあり
うらぶお別れしやを
いそぎ向くは移りし附この
士をわたりし別れしやを
新藤新井くおけりしやを
世に男もそとろ小袖をひこ
して別れぬありしやを
赤穂浪士の後継の若き
おとせしやをわたりしやを
おとせしやをわたりしやを
おとせしやをわたりしやを
おとせしやをわたりしやを
おとせしやをわたりしやを
おとせしやをわたりしやを
おとせしやをわたりしやを



赤穂浪士の後継の
世と同心の心を
通ふとせめく
形えともえん

この赤穂浪士の後継

因の夜不違てよりハ女家村と云
 不不熟人分遊し者有れ女
 彼の村不車打が家系田中道助と
 不熟師あり又之を市小島屋の
 及をあきらめ三日深澤重四の夜
 不を傳へて不方と受て
 深小又の夜不熟から因家共
 つふ不熟て家系をたつて遊的
 亦女本以て老臣との不熟て
 取向は不熟するまゝち我々不熟
 女を遊一翌三月夜と不熟遊
 不熟遊てのまゝ老のまゝ不熟を
 不熟とありしとたて不熟の不熟し
 不熟とも不熟の女子を不熟不熟子
 不熟はあまの不熟不熟不熟の不熟
 不熟し不熟人世不熟不熟不熟を
 不熟不熟し不熟不熟不熟とて
 不熟不熟とて不熟不熟とて

正原の夜不違てよりハ女家村と云
 不不熟人分遊し者有れ女
 彼の村不車打が家系田中道助と
 不熟師あり又之を市小島屋の
 及をあきらめ三日深澤重四の夜
 不を傳へて不方と受て
 深小又の夜不熟から因家共
 つふ不熟て家系をたつて遊的
 亦女本以て老臣との不熟て
 取向は不熟するまゝち我々不熟
 女を遊一翌三月夜と不熟遊
 不熟遊てのまゝ老のまゝ不熟を
 不熟とありしとたて不熟の不熟し
 不熟とも不熟の女子を不熟不熟子
 不熟はあまの不熟不熟不熟の不熟
 不熟し不熟人世不熟不熟不熟を
 不熟不熟し不熟不熟不熟とて
 不熟不熟とて不熟不熟とて



良士の乃
 ひのゆ
 思ひ
 ぬ
 死
 後
 潮田又之丞妻女女
 高教
 世



音
 赤徳
 中村川
 中村勅貼衣が書
 遠三
 手向

義徒四家の内屋敷小死と傳へて
 戸の急赤手不華...
 四五日経ての...
 正久が卒於...
 僧...
 義徒...
 正久...
 僧...
 義徒...
 正久...
 僧...

義徒四家の内屋敷小死と傳へて
 戸の急赤手不華...
 四五日経ての...
 正久が卒於...
 僧...
 義徒...
 正久...
 僧...
 義徒...
 正久...
 僧...

後日十良左忠母
 何ぞのわひ
 わる...
 生...
 何ぞ
 何ぞ

遠い...
 手...

有...
 持...
 後日十良左忠母
 何ぞのわひ
 わる...
 生...
 何ぞ
 何ぞ

たのま

個馬堂岡の落石を凍深ぬき
 清が母の徳の徳を文に
 徳の徳に徳の徳を文に
 徳の徳に徳の徳を文に
 徳の徳に徳の徳を文に
 徳の徳に徳の徳を文に
 徳の徳に徳の徳を文に



自書
 會首座
 内助
 書中

開明
 小説 春雨文庫

第四編ヨリ
 引續き出版 近世の烈婦孝女乃傳説と
 記し面白き珍書あり

松村春輔編輯
 復古夢物語

初編ヨリ
 八編マデ 出版

遠八明治太平記の前篇として嘉永
 六年西米利が使節相州浦賀へ來朝
 以來明治元年伏見戦争迄委々々
 面白き面白き書也

和田定節編輯
 参考鹿兒島新誌

半紙本
 初編ヨリ七篇
 達全部十五冊

此書西国征討の始末を詳細々
 悉く第一の実録あり

東京書肆

大島屋

武田傳右衛門

弥五工門町上ニ番地

010190530103

